

欧米図書館雑感

鳥越文蔵

一九六二年秋から二年間ケムブリッジ大学に籍をおいた。旅行がすぎなので休暇中はヨーロッパ大陸へもアメリカへも足をのばし、図書館めぐりをした。私の専攻するところが、かぶきという欧米とはあまり関係のなさそうなもので、その範囲は狭いが、日本近世演劇の書物がある、めぼしいところは大体いつてきた。限られた見聞ながら報告しておく。

スペイン・ポルトガル

この両国には吉利支丹関係のものは多く、その道の研究者によって、どの図書館には何があると一応調査がゆきとどいている。スペインならエル・エスコリアルとか、ポルトガルならアジューダとか。吉利支丹の研究書に名前の出るようなところは一通り歩いてみたのだが、私の方の書物は何も見つけられなかった。あるところでは「何の本を見るときという目的もなく来たのか」と、きつい口調という日本人に会った。その人のように所在の明

らかな本を見にゆくのも勉強だろうが、こちらののように、掘り出しものをさがして歩くのもまた楽しく、無駄な旅ではなかったと思っている。

とくにポルトガルの記憶はわすれられない。エーヴォオラでは、博物館の受付をしている老人に、「俺は二七年この仕事をしているが、日本人はフレッシュ（何の意味だろう）だ」といつて歓迎してもらったり、汽車で同行することになった青年が、席はとつてくれるし、乗り換えのときは荷物のあげおろしまでしてくるので気が悪いほどだった。最南端の国境の町で別れたのだが、「エスパニョールはわれわれと違うのだから気をつけろ」てなことを、手まねも混じえて注意してくれた。

このように楽しいことばかりではない。日本人のためにいやな思いをさせられたことがある。リスボンの国立図書館にいったとき、大使館の紹介状を持ってこいといわれた。国内でも他の大学の図書館に貴重書を見にゆくときは紹介状を

持つてゆくのだから当然のことかもしれない。だがイギリスやフランスでは、フリでいって勝手に見せてもらえたものだから、ついうっかりしていた。翌日大使館から紹介状をもらっていったが、それだけではすまなくて、写真を三枚も提出しなければならなかった。ロンドンでポルトガルへの入国ヴィザをもらうときにも写真は不要だった。念のため焼きまわして持っていたので助かったが、随分嚴重な身分調査である。あとで聞いた話によると、ある日本人が貴重書を一枚持つて帰って以来、とくに日本人には厳しくなったということである。真偽のほどは知らない。そのことを話した人も「そんなうわさがある」と言葉をごしていた。誤り伝えられたことであつてもらいたいと思う。後からゆく日本人に迷惑をかけるだけではない。学問をする者にとつて最も困る人間だ。二度とこのようなうわさのたたぬよう心掛ければならない。

図書館や博物館に所蔵されているもの

は、大きくいえば全人類の共有財産である。それを見るために、その場所へ出掛ける人は沢山いる。そのためには時間も費用もかかるが、その努力にむくいるようにすべきであらう。丁度、ミロのヴィーナスが日本へきているとき、私はルーヴルで、主のいないその部屋に一時間ばかりいて、尋ねてきた人達を観察したのだが、来合わせた外国人は一樣に落胆していた。ヴィーナスのいないルーヴルと一葉を盗まれた書物を置く図書館とどれだけの違いがあるのだろうか。ともにやめてもらいたい事である。

アメリカ

海外における日本研究は、アメリカが一番盛んであろう。日本の美術品が多く集められていることでも一番で、とくにボストンの美術館は有名である。ことに私の場合、京四条河原の屏風があり、江戸時代初期の芝居が描かれている名品を見たくて、冬休みに大西洋を渡った。ク

リスマス近くで、あわただしい時期にもかかわらず、わざわざ倉庫から出して特別に見せてくれた。錦絵や芝居番付や江戸時代の板本にも貴重なものが多く、短時間では見つかるものではなく、後ろ髪をひかれる思いでボストンを離れたが、一見の客を書庫へ入れて、こちらがよろこびそうなものを次から次へと出してくれる親切がうれしかった。この態度は訪館人口の多寡によるばかりではあるまい。心すべきことのようにである。

アメリカの有名大学にいる日本人に、国内の地方大学にいるより文献雑誌類は揃っているの、その点不自由はしないというようなことを聞いたことがある。ハーヴァードなどはたしかに揃っている。ニューヨークのコロンビア大学も相当なものだ。大学によって、蔵書に特徴があるのは当然のこと、ハーヴァードが社会科学関係とすれば、コロンビアは文学関係が多いように思う。現代文学よりもむしろ古典文学を専門にしている友人は「さほど不自由はしないが、私にと

つてはケムブリッジの方が仕事しやす
い」といつていた。一昔前のことになる
が、雑誌の創刊号をみて楽しむくせがあ
った。そのころ早稲田の図書館では『早
稲田文学』の創刊号が欠けていた。戦争
中館外貸出し中に戦災にあつたのだそう
である。その後補充されたと思うが、趣
味もうすれ、不勉強のせいもあつて、見
たことがなかつた。たまたまコロンビア
の書庫で『早稲田文学』が並んでいたの
で、手にとって昔を思い出しながらとっ
くりと見たのだつた。

アメリカではその他二三の図書館を訪
ねたのだが、一般的傾向として図書館の
出納係が少なくなつていくらしい。人件
費の高い国ではあり、公德心を尊重する
国なので、人を雇うよりなくなつた本を
買う方が安くつくのだそうである。いか
にもアメリカらしいことだ。

大英博物館

ケムブリッジからロンドンまでは汽車

欧米図書館雑感

で一時間二十分かかる。木曜日は授業の
ない日だったので、毎週のように大英博
物館へ通つた。休暇中も旅行をしないと
きはロンドンに居ついで博物館通いをし
た。浄るり関係の本で、日本にもないも
のがあるので通つたわけだ。

私が始める少し前に館員の机のひ
きだしから出てきたという浄るり本など
は、整理のために係りの人の部屋に置き
てあつたが、大部分の日本の本は「兵舎」
と呼ばれる書庫に入っている。館員だけ
が通れる廊下を昇つたり降りたりしてい
くと、外から見えるあの堂々とした建物
とは別棟になつた木造の小屋のようなも
のがある。戦争中兵舎に使われていたた
めに、こう呼ばれているわけだが、その
中に日本のものを含む東洋関係の書が取
めてある。貴重なものも多いので、火で
も出したらどうするのだろうかと心配にな
つたが、イギリスで日本の本を利用する
者は少ないので、閲覧室から選い「兵舎」
に入れておくのだらう。大英博物館蔵の
日本書籍目録二冊本が一八九八年に出て

いる。ケムブリッジの図書館でこれを見
たのだが、二冊目はまだ誰も目を通して
いないらしく、切つてなかつた。六五年
ぶりに私がペーパーナイフを入れたこと
でも、その頻度の想像はつこう。

一日この兵舎にカンヅメにしてもらつ
たことがある。昼食やお茶のとき、「時
間ですよ」と鐘をあげて迎えにきてもら
うだけで、その間は出られない。一日こ
もっている間、本を出し入れにきたのは
一回だけだつた。中国語の本で、係りの
人が読めないで、手伝つて並べた記憶
がある。十月だつたが寒かつた。もちろ
ん暖房などはない。カードではさがせな
い本を手にすることができたので満足し
た。その後も「またカンヅメにしてあげ
ますよ」といわれたが、冬の間はことわ
り続けた。

本を読むときはもっぱら東洋関係の特
別閲覧室ともいふべき部屋を利用して
いた。この部屋には漢和辞典をはじめ文
学辞典などの辞典類が書棚にあるので便
利なうえに、読みかけの本はその部屋で

保管してもらえないので仕事がしやすい。日本学関係の人ともときには顔を合わせる。日本の図書館に入っているのに近い感じで勉強できた。

サトーやアストンのように特殊な人は別として、日本の古書を集めたのは挿絵の興味によっていたようである。その結果、絵入り淨り本が、美術部の方に保管されていることもある。そこでは絵師の名前で整理されているので、書名をいっても出にくいことがある。こんなときはその係りの人の部屋へ行って、「師宣」などと絵師の名前をいうと、一式持ってきてくれる。思わぬ本に出合うこともたびたびあった。しかし錦絵をみると、「歌麿」とでもいうと、大へんな量を積まれる。よほど覚悟しなければならぬ。先程机のひきだしから出てきたといった本は、一七世紀の終りごろ、ケムプファーが日本から持ち出したもので、中には今まで書名すら知られていなかったものがある。早速写真撮影と翻刻許可を申し込んだが、心よく許された。フィルム

ができあがったというのとりにいったら、「この本は大へん貴重なものらしいのでフィルム代はいらぬ」といわれた。出版するとき大英博物館蔵と記してさえもらえばよいというのである。このことは別のところで書きもし、話してもしたことだが、いい話なので何度でも書いておきたい。日本のある図書館で、本を見にいったらノートしていたら係りの人に止めさせられたとか。その係りの人の云い分は、「閲覧願」を出して見にきていたのであって「筆写願」を出して見にきたのではないと、いったとかいわないとか。これも話に聞いたことなので、どこまで本当のことかわからぬ。多分こんな馬鹿げた事が本当にあったとは思えないが、ありそうな気もする。図書館に保管されている書物に対する考え方の相違を再認識するために、このへんはゴチにしておきたい気持である。

ケムブリッジ

私も日本の研究者のはしきれ、机のまわりに本がないとどうも落ちつかない。下宿には本がないし、授業は午前中で終わるので、午後は図書館に入り、六時半チリンチリンと鐘がなって追い出されるまで、図書館の中で時を過ごすことが多かった。

大学の総合図書館は開架式というのか入ると全館書庫のようなもので、クッションのいい椅子のある閲覧室もあるが、一般書なら、そこに限らずどこで読んでもかまわない。書架の近くに行くつも机があり、読みかけの本にはそなえつけの桃色の紙に日付と名前を書き込んではおけば、いついってもその場でつかえる。勉強家の席は大体決まっています。その席へいくと会える。ときに会えないとさつきはいなかったがと聞くと、ちょっとスケートをしにいったなどの答えがくる。そこが一日の生活の本拠地のようになっていた。居心地がいいのである。全館書庫といっても、暗くてよんだような気配はなく、窓は広く高い。内

部で階を区切っているので、二階の窓が三階の人によって開閉されたりするような建て方である。

日本の本は北翼と称される一画の二階と一階で、一階はアストン旧蔵書などの貴重書が収められている。戦後まもなく、百万円の子算をとって購入したものが蔵書の根幹になっている。その後もほとんど購入しているの、ヨーロッパでは日本の本が一番揃っている。コロンビアの友人が仕事しやすいというはずである。大英博物館、オクスフォード大学図書館、それにこのケムブリッジ大学図書館へは、英国で出版された本がすべて寄贈されることになっている。お金を出して買うのは外国の本だけというのが強味である。日本関係への予算の割当もあるにはあるのだろうが、私の知っている限りでは、希望図書を注文できなかった記憶はない。本の好きな日本学の主任教授が、いつも図書目録をみて発注している。私が注文を出すと、もう発注したという返事が多かった。

欧米図書館雑感

大きな木箱に入って送り届けられた新着書を見るのは、いつでも楽しいが、整理は大へんである。日本語の読める係りが一人いて、書名と著者名のカードをつ

くっていく。ときどき難問を持ちこまれることがあったが、参考書も大方揃っているの、何とか解決できた。A県の〇〇村ほどのへんかなどとくる。そのときは「地図室」へ行って『分県地図』でさがしてわかった。だが一番困るのは人名の読み方。個人の名前を出して恐縮だが、「久曾神昇」の読み方はケムブリッジで覚えた。主任教授は日本からの客によっては、図書館へ案内するとこの名前を読むテストをこころみたりする。私も「キーツジョン」とは知っていたが、「ヒタク」とよむとは知らなかった。日本の出版社が、奥付にでも、書名と著者名の正しいふりがなをふっておいてくれると助かるだろう。同様に、雑誌の英文目次のところは、英文の前にローマ字目次が是非必要である。外国人にサーヴィスすることをいうのではない。日本の文献に目

を通す外国人は、少なくとも私の知っている限り、英文を頼りにしないということをお願いしたいのだ。

私が帰ってきてから、日本関係の書架をひろげることになったらしい。本がふえるのはいいことだが、あまり大きくなっても楽しさはふえない。量が質を変えない手段はないだろうし。早稲田の図書館ぐらいになると、本をさがすときはカードによらないと手が出ないが、ケムブリッジではカードなどみないで、書架を見て歩いてさがし出せた。いろんな分野の基本図書があるので、抜き出して読むのにかかかない。雑誌なども日本にいとついでに見過ぎてしまうようなものに関係論文を見つけて勉強したことがある。六三年度のケムブリッジには日本から月刊・年刊を問わず定期刊行物と称されるものが二五〇点余っていた。全部の誌名のノートはあるが列記する必要があるまい。この数が日本の地方大学より揃っているという例の根拠になるかどうか、私にはわからないが、もし本当だと

すれば由々しきことであらう。この中には寄贈もある。その寄贈主は日本の大学の幾校に贈っているのだろうか。日本の政府も、国会図書館だけでなく、全国のいくつかの大学図書館へも、全出版物を取めるよう規制していいと思うし、各大学や研究所で出している紀要の類の配布は、もっと有機的であらねばならぬと思う。

ケムブリッジ大学図書館での失敗談を一つ。教員と大学院学生には館外貸出しをする。学部学生は、総合図書館を利用するのはまれで、各自のカレッジや学部の図書で大体用がすむようになっていく。貸出し期限はないのだが、各学期の終りに一週間から十日間閉館する。その期間の特定の日には必ず返却しなければならぬことになっている。もし前日に借りたのなら一日の期限ということだ。学部などにはない特殊な本を学生のために借り出したり、友人にたのまれて借りることなども行なわれている。あるとき私も又貸しをしていて、三週間返却をおく

らせたことがある。もしなら金七百五十円也の罰金をとられた。もう一、二日おかれて週がかわると千円をとられるところだった。この厳しい制度があるので、返却日にはほとんど返ってくるそうだ。返されないのは大体又貸しの分とか。しかしこんな場合の延滞金は、本を利用した人が払う習慣ができていて、そうである。再開館の日は九九パーセントの本が所定の書架に並んでいるので気分も一新される。

イギリスの学者は日本人ほど自分で本を買わないようだ。そのかわり公共の図書を私蔵書と勘違いすることはなさそうだ。図書館の本をテキストにして学生と本読みをしていたとき、私がうっかり鉛筆で線をひいたら学生に注意された。この学生のように、本を破いてノートする手間ははぶくようなことはすまい。日本では残念だが、まだなかなかここまではないので、監視を厳重にするほかは、だか厳重の度を越して、利用をさまたげるようであってはこれも困る。

閲覧者側の再教育が先決問題だが、心な少数の人間と同様にあつかわれるのは愉快でないと思う人も多かる。罰金制度なども考慮していいのではないだろうか。

紙数の関係で書けなくなったが、ほかにパリの国立図書館、オランダのライデンにある民族博物館でも暖かく迎えられた。とくにパリには、日本にない浄るり本が沢山あるので、前後四回いった。一度は丁度休館して書庫の整理中だったが、イギリスからわざわざきたというので、休館中もいつもとかわらぬように見せてくれた。図書館でつけた厚い表紙のため、中央の二三行が読めないものは、とりはずして見ることも許された。私はフランス語が全くわからないので、うまくお礼もいえないまま仕事をしてきたのだが、この場で感謝の意を表して、この稿を終りとした。

(66・1・10)

(本学文学部講師)